

# 媒介のかたち

——『ボーダー・カンントリー』、つなげる技術としてのリアリズム

塚 越 幸 祐

## 序

誰かの父、これはわかりやすい問題だ。だけど父というのはひとりの人間以上の、じっさいのところ、一つの社会で、そこに踏み込んでお前は成長していくんだ。たぶん、わたしたちにとって、そういうものだ。わたしたちは動かされ、いつも違う社会のなかで成長してきた。(BC 275)<sup>1</sup>

これは『ボーダー・カンントリー』(*Border Country*, 1960)の終盤で、主人公の父ハリー・プライスが口にした言葉だが、作者レイモンド・ウィリアムズのちに「作家」(‘The Writer’, 1980)という小文のなかで次のように書いている。「したがって、世界に対する見方がそれぞれ異なりながらも、ある社会状況のなかへ生まれ落ち、ある言語のなかへと生まれ落ちることによって、作家はま<sup>アライメント</sup>ずつながることからはじめるのである」(‘The Writer’ 六七 = 86)。時代も形式も異なる両テキストがともに示す関係性の強調、いわば、「つながり」への志向は、分野間の交渉なく読まれてきた彼の諸テキストに、少なくとも一つの共有可能な視座を与えてくれるように思える。言い換えれば、従来『ボーダー・カンントリー』は彼が残したメディア論についての研究では軽視されてきたが、実際には、未分化なもの——彼が「感情構造 (structures of feeling)」と呼ぶもの——として、メディア論にて「媒介」概念へと精錬されるものを包摂している。

本稿の目的は、ウィリアムズが著作生活の後半に記したメディア論における「媒介」概念を参照しながら、作家として最初期に書いた『ボーダー・カンントリー』を遡行的に読むことで、同小説が提示しているメディア論に対する「伝統的であるのと同時に創造的」(‘Culture is Ordinary’ 一〇 = 4)な「つながり」を明らかにすることにある。これは彼自身が意図したように、批評／小説といった人工的なカテゴリーを横断する試みでもある (ML 148)。この際焦点をあて

るのが、彼が言祝ぐ「リアリズム」である。ウィリアムズにとって「リアリズム」は、所与の自然を複製的に再現し、本来はさまざまなものによって媒介され距離を隔てている虚構と現実の差異を無化し馴致させるなかで、現実の諸矛盾を想像的に解消する制度的なミメシスだけを指すのではない。「私がリアリズムについて主張したいのは、それがつねに特定の現実認識であり、特定の相互関係意識であったということで、リアリズムが特定の技法上の様式を持っているとか、既存の現実に対して二次的な関係にあると言いたいわけではありません」(PL 350)。そうではなく、彼はそうした写生的なリアリズムとパロディキカルな関係にある別の「リアリズム」も同時に視野に入れる。つづまるところ、それは、美学イデオロギーと共犯関係にある「意識や構築の過程を捕捉し記述する意識的な行為」(K 262)として、(リアリズムにかかわる)媒介の形式性自体に意識を向けさせ、事物のあいだの「関係」を吟味する自己批判的な「リアリズム」である。「リアリズムとは、関係を拡げていくための試金石である。(中略)それは分断された私たちの時代が成長するのに必要なものだ」(LR 331 強調原文)。興味深いことに、ウィリアムズはこの「リアリズム」の理論を、「リアリズムの擁護」(‘A Defence of Realism’, 1976)において文学テキストではなく演劇とメディアを基盤に例証している。のちに確認するが、「リアリズムの擁護」でメディアの「位置取り (position)」に現実を偽装する媒介性を読む彼は、一方で「特定の媒介における一連の形式的な表象」(K 261)を反復、再生産する(自然主義)リアリズム的なメディアの性質を暴きながら、他方で、批判的に自らの媒介性を意識させる契機となる「リアリズム」を含むものとしてメディアの可能性を批評するという「二重視」を実践している。

とはいえ、上で素描した、「媒介」に対して異なる意味づけをおこなう二つのリアリズムという批評的洞察は、現代においてそれほど目を見張るものではない<sup>2</sup>。それどころか、ウィリアムズのこうした理論的側面を過剰に強調することで、彼の実践者の側面を捨象するのみならず、その理論／実践両方への認識の貧困に陥る可能性もあるだろう。そうではなく、形而上学的でさえある極端な二項対立を作ることに抵抗し、その両方が胚胎する中間地点にとどまる彼の批評態度を読まなくてはならない。

上記の批評態度の結実ともいえる彼の「リアリズム」的な位置取りは、「関係を拡大する」ための技術、いわば、「つながり」の技術として彼の諸テキストに通底している。そして、「つながり」を捉えるには、そこに隔たる「距離」を念頭におき、はざまにある「矛盾」に目を向ける必要がある(‘Distance’ 二六八 = 39)。ウィリアムズは矛盾を否定的に捉えてはいない。矛盾は事物が

さまざまに媒介されるなかでその都度生じてきた「選択」の異物であり、日常が経験してきた選択と変化の過程の痕跡である（‘Culture is Ordinary’一三=6）。こうした矛盾は、個人やコミュニティの意志の介在として「伝統」概念にも読み取れると彼は指摘している。「選択的伝統」（ML 123）という言葉で伝統の形成をめぐる「喫緊のパーソナルなものの重要性」（LR 45）を強調する彼にとって、矛盾という個人の主体性の痕跡を内包するものに関心を向けることは、「伝承されてきたものを制圧しようとしているコンフォーミズムの手から、それを新たに奪取する」（ベンヤミン 六四九）手段であるともいえる。

この点で、『ボーダー・カントリー』という小説を、単にメディア論的な「媒介」を予示するテキストとして読むことは作品内部に溶解した矛盾の抑圧にはかならない。野家啓一が指摘するように、「物語る」という言語行為は、個人の記憶や経験を言葉に象ることによって共同化し、それをコミュニティの記憶や経験として蘇生させる不可欠のメディア」（322）である。実際、ウィリアムズ自身が小説によって日常を物語る「ライター」を自認していたことは、こうした物語の可能性への信念を裏打ちしているといえるだろう（Smith 4, 川端 51）。

だとすれば、メディア論と『ボーダー・カントリー』のあいだの矛盾の読解を通じてこそ、理論化された「媒介」からはこぼれ落ちてしまう「前勃興的なもの」（ML 126）の種子を見出せるのではないか。ウィリアムズは小説の機能を言語によって他者との「つながり」をなすことだと主張しているが（*The English Novel* 192）、だとすれば、『ボーダー・カントリー』が提示する「つながり」は、それを時に阻害し時に促す「媒介」に対して、批判と評価が同居する関係にあるように思える。この意味で、同書は彼のメディア論で図示される、相反する二つのリアリズムの日常的な交錯を萌芽的に示すテキストであるだけでなく、メディア論では理論的に説明するしか叶わなかった二つのリアリズムの二重視を実践する、登場人物の個別的な経験も保存している。本稿の目論見は、このように別の著作と根本的に複雑な関係を結ぶものとして『ボーダー・カントリー』を読むことである。それによって、『ボーダー・カントリー』と後年のメディア論のあいだの「つながり」もおのずと見えてくるし、同書の「リアリズム」が示唆する「つながり」の運動への志向性を再考する端緒にもなるはずだ。

## 1. マクルーハンに抗って——ウィリアムズのメディア論

それを確認するためにも、まずはウィリアムズの「メディア＝媒介」概念について説明する必要がある（本稿では以降、彼のメディア概念を「メディア＝媒介」として表記する。これは英語の‘media [medium]’の複雑な含意を翻訳できないためだが、これはあくまでも分析のための弥縫策であり、当然内的な矛盾をはらんでいる）。ニコラス・ガーナムは、ウィリアムズ追悼文のなかで、メディア研究が彼の貢献の一部でしかないことを踏まえつつ、彼がイギリス・メディア研究における中心人物であったと書いている（123）。それにもかかわらず、彼のメディア論研究が十分になされてこなかったのは、彼の「メディア＝媒介」概念の突飛さに原因があるかもしれない。

ウィリアムズの「メディア＝媒介」概念は、技術の代替語としての「メディア」が抹消した相互的なコミュニケーションへの関心を中心に設計されている。その定義はおもに『キーワード辞典』（*Keywords*, 1976）と『マルクス主義と文学』（*Marxism and Literature*, 1977）でなされている。どちらもその内容を要約するのは簡単ではないが、両方で用いられている語を使うなら、「メディア＝媒介」とは社会に「介入」する力を持つ「物質」であるといえる（*K* 203-204, *ML* 158）。そうした「メディア＝媒介」には、言語も含まれている（*ML* 159）。彼にとって「メディア＝媒介」はコミュニケーションとともに社会の構築に不可欠なものである。そして「メディア＝媒介」とコミュニケーション両方に寄与する言語は本質的に重要な物質／素材であり、文化に対して「生産的」な手段ということになる（‘Means of Communication as Means of Production’ 62-63）。言い換えれば、ウィリアムズにとって「メディア＝媒介」とは、コミュニケーションにおける二項間の重複する周縁（ボーダー）ではなく、むしろその内部で人びとが文化に参与する／せざるを得ない空間的なイメージを有したものといえる。

この概念は独自に生み出されたわけではなく、当時社会学において中心的な位置にあった「技術決定論」との相互交渉と、その理論的な構築に貢献した英語圏メディア研究の領袖マーシャル・マクルーハンとの対決のなかで育まれた。ウィリアムズが「メディア＝媒介」論をまとめたかたちで発表しはじめた1970年代は一般に、技術決定論に靈感を受けた機能社会主義や行動主義心理学が社会学を牽引した時代であった（Carey 38）。技術こそが人間の認識の枠組みを変え、人間はそれに対して従属的かつ盲目的に適応するのみという技術決定論の綱要を採用する計量的な社会学は、社会から自律し物象化された「効果」

を数値的に測定するだけだと、ウィリアムズは口撃している (T 128)。また、技術をあらゆる事象を説明するマスター・ナラティブとして扱う技術決定論が、希釈された社会ダーウィニズムとして「大衆」と「少数者」からなる「有機体論」的な図式を反復しかねない、ということも彼が批判をむけた一因だろう<sup>3</sup>。こうした史観において、つねに技術とコミュニケーションを通じたメディアの拡散は約束された民主化という解放へのロマンスとして語られ、技術はその物語の「消滅する媒介者」<sup>4</sup>としてのみその痕跡を残す。

ウィリアムズはこのように技術を自然なもののみならず、社会とミメシスの的な「反映」関係にあるとする考えを批判している。社会と技術の関係においても「距離」を意識する彼にとって、社会は即応的に技術を取り込むわけではなく、複数の媒介をへて「遅延」してそれを現象させる（‘Base and Superstructure in Marxist Cultural Theory’ 一四六—一四七 = 32-33）。つまり、技術は時間性を持ったマテリアルなものであり、技術の消滅論は、技術の過剰 = 自然化という前史以来の逆説の言い換えにほかならない。ウィリアムズは、こうした技術決定論的な視点の固定化 = イデオロギー化が本来多元的であるべきメディアの視点を抑圧しうることを喝破している。『テレヴィジョン』(Television, 1973) で、彼は次のように述べている。

マクルーハンの作品では、形式主義者の伝統すべてと同様に、メディアは決して実践とはみなされなかった。あらゆる個別的な実践は恣意的に設けられた霊的な作用によって置き換えられた。このことが個別的なものだけにとどまらず総体的な意志 (intentions) をも崩壊させた。(130)

ここでは個別的な実践を抽象化し、単数形の「形式」へと昇華する手続きが批判される。彼にとって「メディア = 媒介」というのは形式主義的な「媒介の孤立化」(121) のみで分析できるものではなく、織り目のように重なり合う複数形の諸形式の産物である (K 206, *Towards 2000* 133)<sup>5</sup>。

メディアに対するこうした見方は次の引用にもあらわれている。「技術はいつも、あらゆる意味で社会的である。それは必然的にそのほかの社会的な関係や組織との複雑で可変的なつながりのなかにある」(‘Communication, Technologies, and Social Institution’ 173 強調引用者)。技術はメディアの「なかに」ある。この些細な語感ウィリアムズとマクルーハンのあいだの差異について考えるうえできわめて重要である。

マクルーハン是一般にメディアが普遍的であり、「ありとあらゆる人工物に

法則化でき」(*Laws of Media* 一三五 = 98)、内容にかかわらず形式的に人間を「拡張」していくもの(*Understanding Media* 八一九 = 8)と捉える。実際にはマクルーハンは「メディア」を身体と感覚の相互関係から意味が生じるものとみなしているが(Bolter and Grusin 77)、この点を見落としたウィリアムズは、マクルーハンのメディア概念が人間の脱歴史的かつ形式主義的な抽象化であり、支配的権力によるメディアの所有／支配と連続していると糾弾する。このような図式化からもわかるように、両者はメディアの甚大な影響力については意見を共有している。それにもかかわらず、両者が対立すると考えられるのは、おそらく彼らのメディアへの意味づけをめぐるズレに原因があるだろう。上で述べたようにマクルーハンは身体／感覚の相互作用にメディアの起源を見出している。それはメディアを個人の身体性の次元で問う行為でもある<sup>6</sup>。それに対してウィリアムズの「メディア＝媒介」は、社会／個人のはざまに焦点を当てる。彼にとって「メディア＝媒介」とはその内部で個人が有する「方向の選択」(*K* 73)のエージェンシーを中心軸に据えた、経験を交感し合う動的な「意味づけのシステム」(*Culture* 13)である。

こうした相違からもわかるように、マクルーハンとウィリアムズはメディアに対して根本的に異なる意味づけをおこなっているといえる。マクルーハンがあくまで個人の身体の単位で思考しその関係性については扱わなかったのに対して、社会の形式と個人の「意志」の不可分の関わりを二重視する「メディア＝媒介」概念に依拠するウィリアムズは、メディアが反復する「コミュニケーションの型」(*'Communications and Community'* 四七 = 21)を視認すると同時にそこに内在する個人の「意志」を汲み取ろうとしている。

ここで個人の「意志」を強調することでウィリアムズは、単にメディアの形式だけでなく、その内部で活動する受容者の能動的なメディア経験をも捉えようとしている。そしてそうした「意志」の分析から生じる「コミュニケーションの利害とエージェンシー」(*T* 122)を問うための「ごく重要な姿勢」を彼が「リアリズム」と呼んでいることは重要である(*'A Defence of Realism'* 一七三 = 228)。「意志」を問うことは「行為」を問うことにほかならない(*Anscombe* 八八―八九 = 46-47)。ウィリアムズは「意志」を「メディア＝媒介」分析の範疇に入れることで、その内部で行為し続ける個人を分析する「リアリズム」を構想している(*'Fiction and the Writing Public'* 三〇九 = 29)。技術の媒介性に身を委ねながらもそれに反発し、個人のエージェンシーを保ちながら牛歩的にその位置取りを変えていく、という「メディア＝媒介」の可能性は、このように技術決定論に抗うなかで勃興したものだといえる。「効果は複数実在する意志

との関係のなかでのみ研究することができる」(T124)という言葉も、「メディア＝媒介」概念が意志を持つ個人の相互的なコミュニケーションのなかで成立するものであり、そうした「メディア＝媒介」で生じる言語行為にこそ焦点を当てるべき、という主張と共振しているように思える。

こうした歴史性を内包する「メディア＝媒介」を、ウィリアムズは「多様で応答的な／責任ある (responsive) コミュニケーションの諸システムというわたしたちにとって唯一のリアリスティックな希求」(Towards 2000 139)と意味づけている。だが、こうしてメディアをめぐる二つのリアリズムを峻別し明らかにするだけでは、結果的に彼が非難するはずの方法論的な分析にとどまっている。彼自身が認めるように、「作品に特有の根深く未解消の問題」(‘A Defence of Realism’ 一九三＝239)に取り組んでこそ、彼の「リアリズム」は示せるはずだ。

その意味で、『ボーダー・カンントリー』は未分化な状態にある「メディア＝媒介」をパフォーマンスに示す原体験であるといえないだろうか。伝統的なリアリズムを継承しながら同時にその媒介性を暴く「リアリズム」を併置する実践のなかで、単にそのどちらかを取捨選択するのではなく、それらの対立を二重視しながらそのあいだに「つながり」を見出そうとするテキスト性をも同小説ははらんでいるように思える。『田舎と都会』(The Country and the City, 1973)で回顧されるように(298)、地元コミュニティとの切断の経験を強迫的に改稿することで言語化された『ボーダー・カンントリー』には、「メディア＝媒介」概念では示唆的にしか言及できない「つながり」への欲望が溶解しているのではないか。

## 2. 「つながる」ことは「媒介する」こと

『ボーダー・カンントリー』と「メディア＝媒介」概念のつながりを検討するにあたり、『マルクス主義と文学』にある一節の些細な言葉遣いは一考に値する。「作品はそれ自体が「媒介」のなかにあるのです」(158 強調引用者)。ウィリアムズは技術を論じるときと同じ口調で芸術に「メディア＝媒介」を認めるが、これは単なるアナロジー以上のものを示唆している。別の例を示そう。

文学と芸術をかなり特殊でかなり異なる法則に従属させるようなやり方で、文学と芸術を他の種類の社会实践から切り離すことが、わたしたちにはできないのである。文学と芸術は、実践としてかなり特殊な特徴を持つ

ているかもしれないのだが、それを全般的な社会プロセスから切り離すことはできない。(‘Base and Superstructure in Marxist Cultural Theory’ 一六六=44)

彼にとって文学は社会における特権的なものではなく、あくまでも「書かれた言葉からなるものを通じて創造的な経験を伝達する手段の一つ」(*Drama from Ibsen to Eliot* 14)である。この判断もまた、芸術が「メディア=媒介」のなかにあるという彼の考えを反映しており、そうした分析の「姿勢」としての「リアリズム」はここにも通底している。

さらにもう一つ大事なのは、「切り離すことができない」、つまり、ここで「メディア=媒介」として暗に名指されるものがつながりの志向性も有しているということだ。媒介とつながりが互いを隠喩しあう関係、あるいは、つながりの媒介性を暴く形式の探究、これがウィリアムズにとっての回帰的な問いだといえる<sup>7</sup>。そして、この重なり合う諸形式のなかで各人の「意志」は対話的に本組みされ、感情構造という「残滓的なもの (the residual)」としてテキストに備給される<sup>8</sup>。「残滓的なもの」は破棄されたものではなく、それ自体が「支配的なもの (the dominant)」を代補するものである (*ML* 122)。それは「自然」なものとして「特定の支配的な社会秩序が無視したり、排除したり、抑圧したり、あるいは単純に捉え損ねた」だけで、「活発ですぐそこにあるがまだ十分に声にならない」状態にある「勃興的なもの (the emergent)」としてつねに現れうる存在である (125-126)。

『ボーダー・カントリー』は「創造的な経験」の物語としてこの図式を実践するテキストともとれる。そうした経験は言語によってしか媒介できないにもかかわらず、純粋な言語には還元されないまま、未分化の状態ですべての風景に馴染んでいる<sup>9</sup>。肝要なのは、この形式自体、すなわち、テキストの「支配的な」次元で全知の三人称語りというきわめて慣習的なリアリズムを用いながら、時にそうしたリアリズムの媒介性自体を批判する「残滓的な」「リアリズム」を配備する同小説が、それらのオルタナティブとしての「(前) 勃興的な」ものを包摂しているという「メディア=媒介」の形式自体である。本稿ではそうした諸形式の相互交渉から勃興するものの一例として「つながり」への志向を検討する。

同小説では、主人公マシュー (ウィル)・プライスを中心の20世紀なかば、父ハリーと友人のモーガン・ロッサーを中心とした1926年のジェネラル・ス



トライキ前後の回想という二つの時間軸が概ね交互に語られる。ハリー危篤の電話を受け、「外から来た人には、村ではなく単に人がまばらに集まった農耕地域に思える」(28) 地元グリーンモーへとマシューは鉄道に乗って帰郷する。ロンドンの大学でウェールズの人口移動の歴史経済を講じて生活する彼は、離れているあいだに生じたグリーンモーの変化に様々な場面で「違和感」を感じる。「彼はふと気づいた。自分が旅してきた距離に」(69) という一節はマシューの経験した字義のかつ隠喩的な距離を指し示している。

しばしば同書はつながりの喪失と復縁をめぐるマシュー／ウィリアムズの自伝的ビルディングスロマンとして解釈される (Di Michele 21)。もちろん、この解釈は正当なものだが、実際には、マシュー自身が失ったと考えるつながりの残余は、三人称の語り手によって提示されている (BC 9, 56)。『ボーダー・カントリー』で問題となっているのは、無から有を生み出すようなつながりを創出する行為ではなく、むしろ、不可視なかたちではじめから存在するつながりへのマシューの気づきである。そうした認識の物語はウィリアムズの擁護する「リアリズム」的な運動性と密接に連動している。そして、このつながりとともに隔たりをも生む媒介を再考し、新たな意味づけをおこなうべくゆっくりと「学び去る (unlearn)」(Culture and Society 336) 行為者、という役割においてマシューはハリー／モーガンと弁証法的な関係にある。

物語の冒頭から鉄道が繰り返し言及されるのは、そうしたつながりの症候として解釈できる (20, 31, 37, 62, 65, 133)。ただし、それは「車両が橋を渡ったところで突然リズムが変わった」(8) という挿入によって、マシューが横断するロンドンとグリーンモーのあいだにある地理的、文化的な距離も暗示している。換言すれば、『ボーダー・カントリー』において、鉄道はつながりと距離を同時に指示する媒介として顕在している。

ティム・インゴルドによれば、鉄道は帝国主義的な「横断 (across)」の線としての性質を含んでいる (一二四—二六 = 76-77)。ウィリアムズ自身も鉄道のそうした表象を喝破しており (The Country and the City 208-209)、『ボーダー・カントリー』においても、汽笛を鳴らしグリーンモーを横断する鉄道に同様の解釈を付すことは可能だろう (31, 37, 65, 292)。しかし、インゴルドも認めるように、実際のところ、横断的な輸送の経験は完全に画一的なものではなく、乗客が目的地に着き一歩踏み出した段階で個別的な生へと再編成される (一六五 = 103)。マシューが感じる違和感も、抽象化された鉄道経験を逃れた個別的な経験としてテキストにあらわれている。

加えて、同小説は鉄道経験の抽象化に別の側面からも抵抗している。つま

り、鉄道を破壊的な線として外部から糾弾することを、ハリーら信号手の特殊な感情構造を媒介することによって回避している。当時の信号手についてウィリアムズは『政治と文学』(*Politics and Letters*, 1979)で次のように説明している。「信号手は労働組合の賃金労働者で、自分たちがつながっている村をこえる広大な認識力を備えていた。しかし同時に彼らは直接地元で特定の家族経営の農場とも結びついていた」(21)。このように、「自分の世界」(BC 196)から眺める視点人物として信号手を布置することで、彼は『文化と社会』で批判したイングランド的「産業小説」から脱し、「真の産業小説」と呼ぶ「形式的」な「場」を構築しようとしている(‘The Welsh Industrial Novel’ 221)。信号手たちが鉄道の線が持つ破壊的な性質を脱臼し、線の性質を我有化していたことを彼は詳細に回想している。

まずあの特定の状況を考えてみる。あの田舎駅の男たちは、何よりもまず田園の農業経済という小さな集団内で、産業労働に従事する労働組合員だった。その誰もが、私の父と同じく、依然として農業生活と密接なつながりを持っていた。ひとは鉄道関係の本職に加えて自作で農業を営んでいたし、ほかの大体も農場と関わりがあった。全員が庭を持ち、豚やミツバチ、ポニーを飼っていて、それが彼らの仕事や収入の重要な一部だった。同時に、都市、工場、港、炭鉱を行き来する鉄道があった。信号手にとって格別重要な電話と電信を通じ、広範な社会の網目をこえて他の地域の信号手とコミュニティを持つことができ、仕事以外のことも話し、実際に会うことはなくとも声や意見、うわさを通じて互いによく知っていた。信号手は近代の産業労働者階級の一部だった。(‘The Social Significance of 1926’ 105-106)

ここでは、一つのコミュニティが細部でつながりを有していることが示され、同時に、ここで抽象的全体化に対置される特殊性が日常的生活に由来していることも示唆されている。このことからわかるように、そうした紐帯は鉄道を中心になされている。

『ボーダー・カントリー』ではストライキに失敗した労働者が情緒溢れる筆致で叙述されているが、そこから小説全体がパターン的な田園コミュニティを言祝いでいると結論することはできない。ハリーとモーガンらの失敗は、マシューの視点を介すことで理解できる。マシュー的視点の必要性は、テキスト

内で隠喩的に言及される。「人びとには理念 (idea) が必要だ。自分自身の外部にある何か」(84) というモーガンの訴えは、「自分の世界」に拘泥する彼らの視点的な限界を意図せず告白している。ここで「理念」という語が要となるのは、ウィリアムズが紐解くこの語の歴史性と関係がある。通常想起される具体性を欠いた非実用的な考え、という意味での理念 (観念) は、「实在論」との比較によって 19 世紀後半に生じた派生的な意味である (K 153)。対して、彼が指す「理念」とは、「つねに人びとが実際におこなっていることの表象」(‘The Writer’ 五二 = 77) であり、考えることが同時に行為することでもある現実的な実践である。『文化と社会』においても「理念」は継続的になされるべき行為として記述されている (256)。「自分たちに直接つながった地元にかかわる物質的な利益と反目さえする理念」(‘The Social Significance of 1926’ 107) は、つねにさまざまな「メディア = 媒介」のなかで伝達される。

物語のなかでは、マシューの「相続／継承」が、そうした媒介の中心的な問題系としてテキストに張りめぐらされている。それは小説の形式の次元においてもあてはまる。ウィリアムズは、19 世紀のリアリズム小説における「形成 (Bildung)」を批判する際に「相続プロット」という概念を用いている (*The Country and the City* 176)。彼は、19 世紀のビルドゥングスロマンにおける身元不明の孤児が突然財産を獲得するというおさまりの展開が、登場人物の成長の仮構であり、そうしたプロットが反復されることで、ブルジョワ・イデオロギーに加担するリアリズムの媒介性が隠蔽されていると非難している (‘Forms of English Fiction in 1848’ 三三五 = 163)。

それにもかかわらず、『ボーダー・カントリー』は相続／継承の問題を避けるどころかそれと対峙している。このことは形式的な次元で相続／継承の問題に批判的に応答しつつも、文学的な形式のつながりがあることを明らかにする身振りにも思える。事実、同小説と時期を同じくして書かれた「このアクチュアルな成長」(‘This Actual Growth’, ca., 1961) という草稿からは、彼がこの問題に強く関心を持っていたことがわかる。「あるひとつの世代のなかで新たな可能性が幻視され、伝達され、新たな人間の生のありようが認識される。闘争と奉仕によって、ある期待がかたちをなし、それはやがて実現されていく。」(四一 = 473)。

同書はこの仮構的な成長としての「相続／継承」批判を形式的にだけでなく内容的にも明らかに意識している。マシューが父を訪ねたときの、「彼は単にこの家にいるためだけではなく、生を続けていくためのある種の後継者としてここにいた」(69) という語りはこのことを如実に示している。だが、19 世紀

的な相続／継承とは異なり、同小説において成長の対象であるマシューはハリーとモーガンから物質的にはなにも相続／継承しない。ここでおこなわれるのは、単なる模倣的な相続／継承ではなく、「選択」をとまなう批判的な相続／継承である。それはハリー／モーガンの「自分の世界」という「直接性」を乗り越え総体化を志向するための視点の拡張と必然的に並行する（ルカーチ三一）。ともすればマシューの語り以上にアクチュアルなハリーとモーガンの問題は、だからこそ、単一の時制では解決されず、次の世代へと繰り返されるべき失敗の経験として記述されるのではないか。

こうした解釈によって、ハリーの過剰な早熟が否定的に描写される原因も理解できるだろう。「ほかの人よりもはやく変化への気づきに到達していた」（247）がゆえに、彼は結果的に周囲から孤立する。それは、意図せぬかたちで「集団から距離をとりつつ関与する」という「個人」と「大多数」的な図式を再燃させてしまう（大貫 165）。このハリーの成熟のアイロニーは、テキストにおいて「定住」（BC 280）と喩えられる。それに対してモーガンの「動性」（247）が強調されることで、回想期の登場人物は静／動的な図式のどちらかに分配され、テキストは一旦二項対立的に調停される。しかし、マシューが導入されるやいなやこの二項対立は正常に機能しなくなる。というのも、彼はそうした二項対立のどちらをも無媒介的には相続／継承しない存在としてあらわれているからである。そのことはマシューの誕生と名付けの場面で明示されている。「ハリーはマシューにしたかった。そのとき彼がそう考えた唯一の理由は、マシューは妻と夫どちらの家族にもいない名前だったからだ」（51）。このように、彼はその名前においても、単なる模倣的な成長を否定する人物として機能している。

もう一つ、マシューがハリー／モーガンの二項対立を脱する重要な契機がある。それはアマチュアの科学者兼蒐集家で地方司祭のアーサー・ピューとの出会いである。彼は「引きこもりがちなせいで、村では滅多に目にされず、好かれてもいなく、いまは事実上の非個人的な媒介となっている」（215）と説明され、グリーンモアの住民とは「違う見方」（215）をする人物として描かれている。このピューとの邂逅で重要なのは、彼の評価をめぐるハリーとマシューがはじめて対立することである。ハリーはピューの非社交的な性格を軽蔑するが、マシューはそれに対して、「ピューは非社交的だ。だけどいくつかの理由でそれゆえに尊敬されるべきだ」（215）と反論する。ここでの対立が、ピューのコミュニティでの位置取りをめぐるものであることは示唆深い。実際にはハリー同様ピューも定住者であるのだが、ハリーはそれに気づかない。ハリーの

早熟な変化への洞察は、その早熟さと相まって自己の位置取りへの盲目を意図せず吐露している。言い換えれば、ハリーは自らを視るための位置取りを有していない。この場面で彼は、他者から距離を取り接触を避ける頑迷な人物として記述されている。

ハリーの自己への盲目性は、視点と距離の問題としてマシューに引き継がれる。彼もまた、父と同様、他人と距離を無意識的に取りたがる性分が語り手によって看破される(226)。しかし、マシューはそうした父の欠点を結果的に相続／継承しない。強調されるべきは、この相続／継承としてマシューに訪れる成長が、彼とハリーが共有する鉄道を中心になされている点だ。マシューの場合鉄道への愛着は、回想のなかで父と一緒に起こったごっこ遊びとして、本人が気づかぬまま読者に明かされる(56)。それゆえに彼はハリーのように鉄道に固着的な意味づけをおこなわず、それは潜在的な印象にとどまっている。

マシューの帰郷／成長は、抽象化されたものから徐々に個別的なものへと視点をうつしていく過程と併行している。最初にマシューがグリーンモーを訪れ、ウェルズの路線図を広げたとき、「誰もほかには降りず、彼だけがうす暗いホームに立っていた」(9)。一方、グリーンモーを去るとき状況はまったく異なる。線をたどった一つの終点、横断を終えて個別的な生を再編成しはじめるその空間は奇妙にもごったがえしている。親子の距離を埋めた確信もないまま学期の開始に合わせて帰らざるを得なかった彼が駅に着くと、

長いホームは混雑していたので、彼はいくつか残っていた空き場所に身をうつした。そのとき彼は自分がしたことを理解し、一瞬立ち止まった。こうしてしまうのが癖になっていた。避け癖。彼だけの癖ではなくこのせせこましい社会の癖。(中略)彼は自分がこれまでずっと逃げてきたこと、接触を避けてきたことに気づいた。(中略)彼をなかばおかしくさせた混雑の圧力が突然浄化されたかに思えた。まるで昔から怖かったものが突然彼の中から消滅したかのようだった。(中略)しかし、いま、列車のステップに踏み込んだとき、彼が見たのは群衆ではなかった。それは忙しない、現実の人たちだった。(307-309)

父が避けてきた「接触」をマシューが経験するこの場面は、「自分の世界」にこもる視点から脱する契機といえる。肝心なのは、ここでマシューの自己認識と他者認識が連続していること、そしてもう一つ、この認識の転回が鉄道という技術を媒介になされていることである。鉄道は父とのつながりでありながら、

同時にその位置取りを差異化する役割を担っている。ハリーにとって鉄道はあくまでも「自分の世界」からのみ観察され、意味づけられる。それに対し、マシューは鉄道を通じて「自分の世界」の形式的な慣習性を喝破する「別の見方」を獲得する。これは「自分の世界」を起点にした鏡面的なリアリズムに対峙し、反復的で再生産的な視点を可視化する自己批判としての「リアリズム」の運動と重なる。そしてこのマシューの位置取りこそ、ウィリアムズが「リアリズムの擁護」で称揚する「リアリズム」の可能性である。多少長くなるが、そのまま引用しよう。

ここで視点にまつわるもう一つ別の問題を考えてみたいのだが、この問題に強調点を置くことはより積極的な意味あいをもつ。メディアは物事をありのままに提示しているのだとおなじみの主張を繰り返す。ところが、そうやって現に起きていることを再現しているとみえるものの内部で意味の生産が生じている。ここではそうした人目につきにくい要素のうちの一つを考えてみたい。それはカメラの位置取りの問題のことであって、ある種の社会不安に関与しているものとして表現されてしまう人びとと警察隊とのあいだで争いが生じるとき、カメラはどこにあるのだろうか。警察の後ろ側にカメラが陣取ることがいかに日常化され、いかに自然化されているのか。ニュース映画であろうと、虚実をとりまぜてこうした騒動をレポートしたものであろうと、その度合いはじつに驚くほどだ。警察隊はカメラに同伴するものとして映像化される。(一八七—一八八= 236 強調原文)

ここでは「メディア＝媒介」という一見中立的な観察者が、実際には権力に与する位置取りにあり、かつそれを隠蔽していることが指摘される。ウィリアムズが「リアリズム」に賭けるのはこの点において、つまり、こうした視点の偽装性をその感情構造とともに暴き出すところにある。ただし、繰り返すが、こうした位置取りの「メディア＝媒介」性自体を彼は棄却しているのではない。というのも、そうした「リアリズム」の可能性自体、外部観察的な視点だけでは習得できず、マシューのように、媒介の内部にとどまりながらその存在自体を認識することではじめて見出せるからである。その意味で、マシューの成長は、ハリー／モーガンからの選択的な相統／継承なくしては成立しないのだ。

『ボーダー・カンントリー』で相統／継承は単に対象を模倣的に引き継ぐのではなく、そこに潜む問題点を捕捉しながら、つながりをさらにまた次へと伝達

する媒介的な行為として叙述される。そして形式的、内容的にさまざまな「メディア＝媒介」のなかで生じる相続／継承によって現前する対象同士の強烈な「つながり」は、新たに創出されるのではなく、「メディア＝媒介」のなかで視点の位置取りを変えることで発見できる感情構造として同小説に内包されている。『ボーダー・カントリー』は、こうした個人的な相続／継承という選択の瞬間を物語化することで「関係の拡大」の過程を凝視する批評的な実践ともいえるだろう。

## 結び

「距離を測り終えることで私たちは家路につく」(BC 341)。この語りはマシューとハリーのつながりが不可視の相続／継承によってひとまず確保できたことを象徴的に示している。ここでのつながりは、媒介の形式を批評することでその可能性を拓く「リアリズム」的な運動と同期し、『ボーダー・カントリー』における「帰郷」は、主題論的なレベルでこうした運動を志向する言語行為として作用している。その意味で、マシューの「自分の世界に戻る」(267) 行為は、「異なる見方」を相続／継承することで可能になるものといえるだろう。彼はそのことを最終的に実感するが(337)、依然としてそれは「理解したわけではない、でもなんとなく感じる」(340) という経験論的な次元にある。『ボーダー・カントリー』は、理論化されぬまま未分化に残るこうしたつながりの感情構造を肯定する「リアリズム」としてメディア論に応答している。

だが、本稿冒頭で述べたように、つながりはつねに「拡大」され続けなくてはならない。そうでなければ、それは時間のうちに慣習的な意味へと風化してしまう。だからこそ、つながりは意味と形式をたえず更新していく運動として記述される必要がある。もちろん、『ボーダー・カントリー』も例外ではない。マシューも歴史を書くことのアポリアを未完の問いとして残している(277)。その点で彼もまた、媒介のなかで次代へと伝達すべき問題を抱えている。だがそれゆえに彼は再度、自分の子ハリーとの関係に不断の過程としてつながりを拡大することができるのではないだろうか。物語がマシューと子どもとの「接触」によって結ばれることは(341)、そうした新たなつながりを予期するものとして解釈できる。

レイモンド・ウィリアムズの諸テキストを一つの全体として読むことは、このつながりの志向を経験する手立てとなる。彼は『ボーダー・カントリー』を

19世紀のビルドゥングスロマンを批判的に相続／継承するなかで書き、その後小説研究のみにとどまることなくメディア論へと自らの経験を接ぎ木した。この実践を言語という「メディア＝媒介」を通じて選択的に相続／継承することで、わたしたちもまた、自分の世界を批判的に捉えることができる。彼のテキストはその意味で、「メディア＝媒介」に身を委ねながらその内部に主体性を見出し参与する、つながりの技術として読むことができるのだ。

## 注

1 作品は初出のみ英語を併記する。括弧内の年号は原則初版年を指す。訳語については定訳に倣ったが、*Border Country*のみ『辺境』（小野寺健 訳）から『ボーダー・カントリー』へと変更した。訳文については、文献表に記載してあるものはそれに準じ、それ以外はすべて拙訳を付した。ページ表記は、原文をアラビア数字で、邦訳は漢数字にて示した。本文中で用いる略称については文献表を参照。

2 実際、ウィリアムズの思考形成に寄与したジェルジュ・ルカーチは、優れたリアリズムが無媒介的な現実の反映とは対立することを指摘している（Lukács 58）。また、フィリップ・ラケー＝ラバルトも、デイドロの時代ですでに「制限的なミメシス」と「産出的なミメシス」という二つのパラドキシカルな関係が意識されていたことを指摘している（二四＝255）。

3 ポール・ジョーンズによれば、ウィリアムズは最初からマクルーハンに批判的だったわけではない。むしろ、『メディア論』（*Understanding Media*, 1964）が出た段階では、「技術決定論」については批判しつつも全体としては好意的でさえあった。こうした態度が変わったのは、1968年にマクルーハンがテレビによる「有機的文化（organic culture）」の再形成を主張したからではないかとジョーンズは推測している（157-158）。当時の彼のメディア的な露出度を考えれば、この部分の厳密な証明は難しいとはいえ、マクルーハンと彼の「技術決定論」には、明らかにF・R・リーヴィスとその周辺の影響を見ることができる。リーヴィスとウィリアムズの関係性については、山田雄三と遠藤不比人がそれぞれ異なった角度から分析している（山田 95-97, 遠藤 15）。

4 「消滅する媒介者」という語はフレドリック・ジェイムソンの同名の論文（1974）による。このなかで彼は、マックス・ウェーバーを例に、社会的な精神（媒介）であるはずのプロテスタンティズムが、社会を組織化する過程でその効果は残しながら消失する現象にこの語をあてている（321-322）。

5 同様の指摘を近年キャロライン・レヴィンは *Forms*（2015）でおこなっている。同書でレヴィンは、ウィリアムズが提示した「支配的」、「残滓的」、「勃興的」という概念を先行研究として認めている（121-127）。一方で彼女はウィリアムズの理論がクロノロジカルで単線的な時間感覚に縛られているとも指摘している（62-63）。しかし、この評価には疑問が残る。ウィリアムズのこの概念は過去から未来という一方通行の時間性



ではなく、その影響関係は複雑に交錯しており単純化することはできない（この実践が『田舎と都会』における「牧歌」の分析である）。また、河野真太郎は三項に交錯的な時間性が存在することを、ウィリアムズ後年のユートピア論「想像力の時制」（‘The Tenses of Imagination’, 1978）と絡めて指摘している（42）。

6 ジェイ・デイヴィット・ボルタとリチャード・グルーシンは「感覚中枢（sensorium）」を重視するマクルーハンの理論がのちのフェミニズム身体論において取り入れられていると指摘している（77）。

7 『政治と文学』で、彼は次のように述べている。「そこで気づいたのは、私が書いていたのは不確かさと矛盾の経験であって、それに見合った形式を見つけるという難題に際してその経験は繰り返されました」（PL 272）。この形式性への関心は1974年の段階でも確認できる（‘Communications as Cultural Science’ 23）。

8 本文では略式的にしか触れることのできなかつた「感情構造」については『イブセンからブレヒトまでの演劇』（*Drama from Ibsen to Brecht*, 1968）で詳述されている。

感情構造は識別可能な形成物、通念や組織に十全には馴染まなかつた、ただそれだけの理由で、根深い個人的な感情として最初は受け取られる。たしかに、作家ひとりひとりの感情構造は独特で、ほとんど通約不能な独りよがりに見える。こうした事例を私たちが明白に理解するのは、過去の時代の作品や思考のなかであるが、その時代にあっても、その作品や思考を生み出した人物は、形成の最中で、自分からも他人からも孤立し、切り離された、理解しがたい存在であることが往々だった。しかし、幾度となくその感情構造が伝播されていくのであれば、それはつながりであり、応答であり、時代的な共有物でもある。そのときそれはすぐに目に入ってくるのだ。（18）

9 この点については、2008年におこなわれたウィリアムズ・シンポジウムでの鈴木英明のコメントから示唆を得た。なお、このシンポジウムの記録は『英語青年』2009年2月号に掲載されており、筆者はそれを参照した（49）。また、ウィリアムズ自身もこのジレンマについて言及している。「しかし結局のところ、ほかならぬ事実と感情のないまぜになった世界を、このより伝統的な想像による媒介[リアリズム]なくしてそれがどうやって伝達されるのか、わたしにはわからない」（‘Fiction and the Writing Public’ 三〇九= 29）。

## 引用文献

- Anscombe, G. E. M. *Intention*. 2nd ed., Blackwell, 1963. (『インテンション——実践知の考察』菅豊彦訳、産業図書、1984年。)
- Bolter, J. David, and Richard Grusin. *Remediation: Understanding New Media*. MIT, 1999.
- Carey, James W. *Communication as Culture: Essays on Media and Society*. Routledge, 1988.
- Di Michele, Laura. ‘Autobiography and the “Structure of Feeling” in *Border Country*.’ *Views beyond the Border Country: Raymond Williams and Cultural Politics*, edited by Dennis L.

- Dworkin and Leslie G. Roman, Routledge, 1993, pp. 21-37.
- Freedman, Das. 'A "Technological Idiot"?': Raymond Williams and Communications Technology.' *Information, Communication and Society*, vol. 5, no. 3, 2002, pp. 425-442.
- Garnham, Nicholas. 'Raymond Williams, 1921-1988: A Cultural Analyst, a Distinctive Tradition.' *Journal of Communication*, vol. 38, no. 4, 1988, pp. 123-131.
- Ingold, Tim. *Lines: A Brief History*. Routledge, 2007. (『ラインズ——線の文化史』工藤晋 訳、左右社、2014年。)
- Jameson, Fredric. 'The Vanishing Mediator; or, Max Weber as Storyteller.' *The Ideologies of Theory*, Verso, 2008, pp. 309-343.
- Jones, Paul. *Raymond Williams's Sociology of Culture: A Critical Reconstruction*. Macmillan, 2004.
- Lacque-Labarthe, Philippe. 'Diderot: Paradox and Mimesis.' *Typography: Mimesis, Philosophy, Politics*, edited by Christopher Fynsk and Linda M. Brooks, Harvard University Press, 1989, pp. 248-266. (『パラドックスとミメシス』『近代人の模倣』大西雅一郎 訳、みすず書房、2003年、10-47頁。)
- Levine, Caroline. *Forms: Whole, Rhythm, Hierarchy, Network*. Princeton University Press, 2015.
- Lukács, Georg. *Studies in European Realism: A Sociological Survey of the Writings of Balzac, Stendhal, Zola, Tolstoy, Gorki and Others*. Translated by Edith Bone, Grosset and Dunlap, 1964.
- McLuhan, Marshall. *Understanding Media: The Extensions of Man*. Routledge, 2001. (『メディア論——人間の拡張の諸相』栗原裕・河本仲聖 訳、みすず書房、1987年。)
- McLuhan, Marshall, and Eric McLuhan. *Laws of Media: The New Science*. University of Toronto Press, 1988. (『メディアの法則』中澤豊 訳、NTT 出版、2002年。)
- Smith, Dai. *Raymond Williams: A Warrior's Tale*. Parthian, 2008.
- Williams, Raymond. 'Base and Superstructure in Marxist Cultural Theory.' *Culture and Materialism*, Verso, 2005, pp. 31-49. (『マルクス主義文化理論における土台と上部構造』大貫隆史 訳『共通文化に向けて——文化研究Ⅰ』川端康雄 編訳、大貫隆史・河野真太郎・近藤康裕・田中裕介 訳、みすず書房、2013年、144-175頁。)
- . *BC = Border Country*. Edited by Dai Smith, Parthian, 2006.
- . *Communications*. Penguin, 1962.
- . 'Communications and Community.' *Resources of Hope: Culture, Democracy, Socialism*, edited by Robin Gables, Verso, 1989, pp. 19-31. (『コミュニケーションとコミュニティ』川端康雄 訳『共通文化にむけて』44-64頁。)
- . 'Communications as Cultural Science.' *Journal of Communications*, vol. 24, no. 3, 1974, pp. 17-25.
- . 'Communication, Technologies, and Social Institution.' *What I Came to Say*, edited by Neil Belton, Francis Mulhern and Jenny Taylor, Hutchinson Radius, 1989, pp. 172-192.
- . *The Country and the City*. Oxford University Press, 1973.
- . *Culture*. Fontana, 1981.

- . *Culture and Society 1780–1950*. Columbia University Press, 1958.
- . ‘Culture is Ordinary.’ *Resources of Hope*, pp. 3-18. (「文化とはふつうのもの」川端康雄 訳『共通文化にむけて』8-36 頁。)
- . ‘A Defence of Realism.’ *What I Came to Say*, pp. 226-239. (「リアリズムの擁護」大貫隆史 訳『想像力の時制——文化研究Ⅱ』川端康雄 編訳、遠藤不比人・大貫隆史・河野真太郎・鈴木英明・山田雄三 訳、みすず書房、2016 年、170-194 頁。)
- . ‘Distance.’ *What I Came to Say*, pp. 36-43. (「距離」大貫隆史 訳、『共通文化にむけて』262-277 頁。)
- . *Drama from Ibsen to Brecht*. Hogarth, 1993.
- . *Drama from Ibsen to Eliot*. Chatto and Windus, 1952.
- . *The English Novel: From Dickens to Lawrence*. Hogarth, 1984.
- . ‘Fiction and the Writing Public.’ *What I Came to Say*, pp. 24-29. (「小説と筆者大衆」河野真太郎 訳『共通文化にむけて』301-311 頁。)
- . ‘Forms of English Fiction in 1848.’ *Writing in Society*, Verso, 1983, pp. 150-165. (「一八四八年のイングランド小説の諸形式」川端康雄 訳『想像力の時制』317-339 頁。)
- . *K = Keywords: A Vocabulary of Culture and Society*. Revised ed., Fontana, 1988.
- . *LR = The Long Revolution*. Edited by Anthony Barnett, Parthian, 2013.
- . *ML = Marxism and Literature*. Oxford University Press, 1977.
- . ‘Means of Communication as Means of Production.’ *Culture and Materialism*, pp. 50-63.
- . *PL = Politics and Letters: Interviews with New Left Review*. Edited by Geoff Dyer, Verso, 2015.
- . ‘The Social Significance of 1926.’ *Resources of Hope*, pp. 105-110.
- . *T = Television: Technology and Cultural Form*. Edited by Ederyn Williams, 2nd ed., Routledge, 2003.
- . ‘This Actual Growth.’ *Raymond Williams: A Warrior’s Tale*, edited by Dai Smith, Parthian, 2008, pp. 470-474. (「このアクチュアルな成長」河野真太郎 訳『共通文化にむけて』37-43 頁。)
- . *Towards 2000*. Hogarth, 1983.
- . ‘The Welsh Industrial Novel.’ *Culture and Materialism*, pp. 213-229.
- . ‘The Writer: Commitment and Alignment.’ *Resources of Hope*, pp. 77-87. (「作家——コミットメントとつながり」鈴木英明 訳『想像力の時制』52-70 頁。)
- 遠藤不比人「ラディカルな分離とコミュニティ——レイモンド・ウィリアムズが賭けたもの」『英語青年』第 151 巻、第 12 号、2006 年、14-17 頁。
- 大貫隆史『「わたしのソーシャリズム」へ——二〇世紀イギリス文化とレイモンド・ウィリアムズ』研究社、2016 年。
- 川端康雄「ボーダーのライター」『英語青年』第 154 巻、第 12 号、2009 年、50-57 頁。
- 河野真太郎「〈経験〉の時制——*The Volunteers* における未来の考古学」『英語青年』第 154 巻、第 8 号、2008 年、41-47 頁。
- 高山智樹『レイモンド・ウィリアムズ——希望への手がかり』彩流社、2010 年。

野家啓一『はざまの哲学』青土社、2018年。  
ベンヤミン、ヴァルター「歴史の概念について」『ベンヤミン・コレクション1——近代の意味』浅井健二郎・久保哲司訳、筑摩書房、1995年、643-665頁。  
山田雄三『感情のカルチュラル・スタディーズ——『スクリエーティニ』の時代からニュー・レフト運動へ』開文社、2005年。  
ルカーチ、ジェルジュ『歴史と階級意識』城塚登・古田光訳、白水社、1975年。